

【実践研究】

造形的視点から見る児童文化財 「ペープサート」の発展と可能性

——保育の実践と検証を通して——

山本 将之*・宮坂 慎司**・武本 大志***

キーワード：児童文化財 保育教材 ペープサート

【凡例】

- ・引用文は「 」で示し、単行書・雑誌名は『 』で示した。
- ・引用文中にある「 」表記部分は、引用に際して『 』と改めた。
- ・本文中において、筆者が重要であると判断した言葉については「 」で示した。

1. はじめに

ペープサートとは割箸と紙によって作られる人形、及び、その紙人形による劇のことを意味する。現在、ペープサートは保育教材として広く普及しているが、その源流は享和（1801-1804）の時代の「写し絵」（「影芝居」）に遡る。「写し絵」とは、『フロ』と名のついた幻灯機へ、ガラス板（当時はギヤマンといった）へ染料で描いた絵の原画を入れ、それをいろいろに操作して、活動的に映画効果を写しだしていたもの¹⁾であり、亀屋都楽（生没年不詳）がこれを見世物として興行した。そして明治中期に入り、落語家の三遊亭円朝（1839-1900）の弟子である新三郎（生没年不詳）という人物によって「写し絵」は更なる発展を遂げる。「新三郎という人が、『影絵のたわむれ』という、竹ぐしのついた紙人形を操作するするシルエットパペットの形態に、当時寄席で全盛をきわめていた、この『写し絵』の原理に加えて、新しく紙人形の芝居を発明しました²⁾。この言葉から、「竹ぐしのついた紙人形」が明治中期には既に作られていたことがわかる。なお、この紙人形は「写し絵」や「影芝居」という名称を引き継いでいたが、大正末期には「紙芝居」という言葉へと変化している。そして、昭和初期にはこの「竹ぐしのついた紙人形劇」を行う業者が急増したため、「1. 人形制作が間に合わないこ

*大阪大谷大学教育学部

**東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科

***茨城県立伊奈高等学校

と。2. 演出諸技術の簡易化。3. 内容にスピード性が要求されたこと。』³⁾等の問題が生じ、結果として現代と同じ形状の絵話式の紙芝居が生まれることになる。なお、この2種の紙芝居を区別するため、紙人形式のものは「立絵」、絵話式のもの「平絵」と呼ばれていた。この「立絵」は、「平絵」の発展と共に廃れてしまうが、倉橋惣三（1882-1955）によって、「立絵」は児童文化財として保育現場へと取り込まれた⁴⁾。これがペープサートの誕生に至る歴史的な経緯である。なお、ペープサートは「paper puppet theater」を縮めた造語である。

以上、ペープサートの源流を概観したが、特筆すべきはその形状が「立絵」から大きく変化していないことにある。永柴は「ペープサートは『立絵』といわれていたものの形をしています。しかし、形は立絵のようですが、その感覚、内容、原理など、それは昔の古い『立絵』とは全然違ってきます』⁵⁾と述べており、「立絵」と「ペープサート」の本質が異なることを指摘している。事実、「立絵」の内容は亡霊・怪物・怪談・ヤクザ・エログロ等が多く、またその人形は精緻に描かれているものが多い。一方でペープサートの内容は子どもの発達に応じたものが多く、その人形は現代的なアニメ風の絵柄で描かれることが多い。つまり、両者の内容が大きく異なる点は永柴の指摘する通りであるが、一方で人形の構造に焦点を絞ると、「棒に紙を貼り付ける」という点において両者が同様の構造であることは明らかである。つまりペープサートは、その起源である明治中期の「写し絵」以降、その構造においては大きな変化を見せていないと言える。

そのため本研究では、構造部分に着目した先例のない新しいペープサートに注目し、その有用性について実践を通して検証する。このペープサートとは、具体的にはマグネットを使用する「着せ替え可能なペープサート用軸棒付き紙人形」⁶⁾であり、これは宮坂によって考案された。

このペープサートでは、マグネットを埋め込んだ専用の木の棒【写真 1-1】を、従来の竹串や割箸の代わりとして用いる。そして紙人形にゼムクリップ等の鉄を付けることによって【写真 1-2】、木の棒と紙人形の自由なつけ外しが可能となる【写真 1-3】。この「マグネット式」のペープサートは2014年に開発されているが、子どもの前で劇を演じるような実践的な検証は行われていない。そのため、本研究ではマグネット式ペープサートの実演と検証を通して、新たな保育教材の有用性を探ることを目的とする。

現在認められる多様な保育教材については、現状を完成形とするものではなく、あらゆる保育教材が更なる発展の可能性を秘めていると考える。特にペープサートは「立絵」の形状から大きく変わっているとは言い難く、現代の道具を用いることによって更なる表現の展開が見込まれる。本研究において新しい保育教材の有用性を探ることは、ひいては多様な保育教材の発展の可能性を探ることに繋がるため、この意味において当研究は幼児の造形領域の発展に寄与すると考える。

研究の方法は次の通りである。まず「保育実践演習 A」⁷⁾の授業内で、マグネット式ペープサートを用いたオリジナルの紙人形劇の脚本を考え、次いで制作を含めた劇の準備を進める。そして大学に招待した5歳の子どもたちに向けて劇を発表し、その劇の内容を含む造形的な工夫について、学生のアンケートと併せて考察を試みる。



【写真 1-1】
マグネットを埋め込んだ棒



【写真 1-2】
ゼムクリップを貼り付けた
キャラクター（裏面）



【写真 1-3】
マグネットを埋め込んだ棒に
貼り付けたキャラクター

2. 従来のペープサート

発展型のペープサートを検証する前に、従来のペープサートの作り方や特徴を振り返る。従来のペープサートを作る際には、まず割箸の3分の1程度に木工用ボンドをつける。そして、キャラクターを描いた紙（A面）の裏面に木工用ボンドをつけ、さらにもう一枚の紙（B面）で割箸を挟むようにして貼り付ける【写真 2-1】。

使用する材料が割箸と紙とボンドのみであるため、手軽にかつ安価に制作できる点に特徴を有する（1）。そして実際に演じる際に、割箸を回転させることで裏に書いた絵が残像として残り、子どもの興味を引くことができる点にも特徴を有している【写真 2-2】（2）。なお、A面とB面に異なる絵を描くことによって、1本のペープサートで2種類のキャラを演じることができる（3）。例えばA面に猫のキャラクターを描き【写真 2-3】、B面に間延びした猫のキャラクターを描くことで【写真 2-4】、1つのペープサートで2種類のキャラクターを使い分けながら演じることができる。このように、従来のペープサートには上記（1）～（3）の特徴が認められる。

しかし、一方で短所も認められる。まず、割箸と紙が接合されているため、片付けの際にかさばる点があげられる。また、段ボールを舞台として使用することで、一人で複数のペープサートを扱うこともできるが【写真 2-5】、段ボール内部の中芯が劣化しやすく、耐久面で問題を有していると言える。このような問題点をふまえて、発展型ペープサートの詳細を見ていく。



【写真 2-1】
ペープサートの制作過程



【写真 2-2】
回転させたペープサートの効果（残像）



【写真 2-3】
ペープサート（表面）



【写真 2-4】
ペープサート（裏面）



【写真 2-5】
段ボールに挿したペープサート

3. 発展型のペープサート

発展型のペープサートは第1章で述べた通り、磁石を埋め込んだ棒を用いる。この棒はヒノキ材である。ヒノキは古来より神社仏閣の柱として使用されており、高い耐久性に特徴を有している。この棒の寸法は幅 260 mm×高さ 12 mm×奥行き 3 mm であり、細長い直方体のような形である【写真 3-1】。穴の直径は 5.9 mm であり、角は怪我をしないように削られている。

磁石は市販されている直径 6 mm のネオジウム磁石【写真 3-2】であり、強力な磁力に特徴を有している。棒の穴の直径を磁石の直径よりも 0.1 mm 小さくしているが、これは棒から磁石が外れることを防ぐためである。

紙は厚口のケント紙を使用しており、紙につける鉄にはワッシャー【写真 3-3】やゼムクリップ【写真 3-4】を使用した。ただし、これら鉄素材の大きさや厚みに注意しなければならない。鉄の容積が大きくなれば必然的に磁力が大きくなる。磁力が大きいと、棒から外す際に紙

が折れ曲がってしまうことがあるため、この鉄には適度な大きさが求められる。本研究では主として27 mm（大サイズ）のゼムクリップを使用した。また、紙が大きい場合には直径12 mm×厚み0.8 mmのワッシャーを使用した。

さらに、紙につけるゼムクリップ同士の位置関係にも留意しなければならない。棒の磁石と同じ間隔にゼムクリップを配置しなければ、十分な磁力を得ることができず、例えくっついていたとしても外れてしまうことが懸念される。そのため、棒の磁石と同じ間隔でゼムクリップを固定しなければならない。なお、ゼムクリップの固定は白布テープで行った。

また、本研究では舞台を木材で制作している。市販されている幅90 mm×高さ25 mm×奥行き15 mmの木材を2つ用意し、裏側からビスで接地面を固定する【写真3-5】。さらに木材の片面にステンレスシートを貼る。0.1 mm厚のステンレスシートは市販のもので、その片面に両面テープが貼られているものを使用した。ステンレスは非常に硬い素材であるが、厚み0.1 mmであれば金切りばさみでの切断が可能のため、余分なシートを切り離し、完成とした【写真3-6】【写真3-7】。

次いで、1つのキャラクターができるまでの制作過程を以下に記す。

まず磁石の向きに注意し、木の棒の穴に磁石を入れる【写真3-8】。このとき、磁石の向きをそろえることで、棒と棒が反発してしまうことを防ぐことができる。そして、磁石を穴に入れる際は、木槌で軽く叩きながら入れていく。上記のように穴の直径を磁石の直径より0.1 mm小さくしているため、外れにくくなっているが、更に上からシールを巻いて補強する【写真3-9】。これは、「棒が折れた時にネオジム磁石が散乱すること、及び、誤飲による事故」の防止を目的としている。特に、強力な磁力をもつ当磁石の誤飲は重大事故に繋がりがかねないことから、磁石が外れないよう配慮を尽くさなければならない。

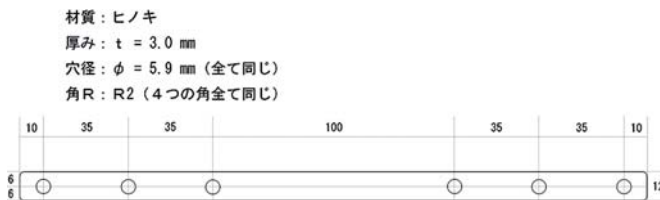
なお、このシールには市販の「ネームシール」を使用した。色は木の質感を損なわない茶色を選んでいる。

次いでキャラクターを制作する。描画材はキャラクターや劇の印象に影響を与えるため、その雰囲気に合わせて選択しなければならない。本研究では主にクーピーペンシルを使用している。この理由として、1つにクーピーペンシルは使用後に紙をこすっても色が落ちにくく、片付けの際に重ねて保管することができるためである。また1つに、色合いが柔らかいため、鑑賞者が落ち着いて劇に集中できると考えたためである。しかし先のように表現に応じて描画材を選択するため、中にはパスやマジックを使用する学生もいた。パスに関しては、使用後にこすると色が落ちてしまうため、コンテとめ液を表面に吹きかけ、色粉を定着された。

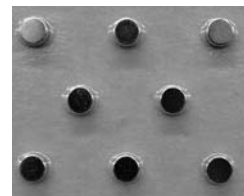
マグネット式ペープサートの想定されるメリットは次の通りである。このメリットとは、まず「多数のキャラクターを舞台に登場させられる点」があげられる。これは従来のペープサートと同様であるが、マグネット式のペープサートでは舞台全面にステンレスシートが貼られて

いるため、このシート上であればどこでも自由に棒を貼り付けることができる。また木材やステンレスは段ボールよりも耐久性が高いため、一度作ると多年にわたっての使用が見込まれる。そのため、従来のペープサートよりも多数のキャラクターを扱いやすいと言える。次いで、「キャラクターを高い位置に配置することができる点」があげられる。棒を複数本連結させることで、1本の長い棒になる。この棒の先端にキャラクターをつけることで、従来のペープサートでは難しい高さのある表現が可能となる【写真3-10】。さらに、この長い棒の下段に、上段と異なるキャラクターをつけることによって、同じ縦軸の中で高低の表現を取り入れることが可能になる【写真3-11】。このように、「高低の空間認知を鑑賞する子どもたちが感受できる点」にもメリットを有すると考える。また、細かい点であるが、キャラクターを外すことができるため、「向きを変えることができる点」もメリットである【写真3-12】【写真3-13】。これにより、例えば空を飛ぶ鳥が上昇している様子や、あるいは下降している様子を表現することが可能になる。さらに、従来のペープサートと同様に「キャラクターを描いた紙の両面を使うことできる点」があげられる。これはゼムクリップ等の鉄を挟むように別の紙を貼り付けることで可能となり、1枚の紙で2種類のキャラクターを扱うことができる。まとめると、①多数のキャラクターを舞台に登場させられる点、②棒の連結による高低の表現、③キャラクターの向きを変えることができる点、④絵を描いた紙の両面を活用できる点、の4種のメリットが発展型のペープサートには見込まれる。

次いで想定されるデメリットについて見ていきたい。これは棒が平たいため、回すことができない点があげられる。従来のペープサートであれば、回すことによって残像が残り、子どもの興味を引くことができる。このような動作を行うことができない点に、発展型のペープサートのデメリットが想定される。



【写真3-1】
マグネットを埋め込みむ棒の設計図



【写真3-2】
ネオジウム磁石

造形的視点から見る児童文化財「ペープサート」の発展と可能性



【写真 3-3】
ワッシャー



【写真 3-4】
ゼムクリップ



【写真 3-5】
舞台の裏側



【写真 3-6】
完成した舞台（表面）



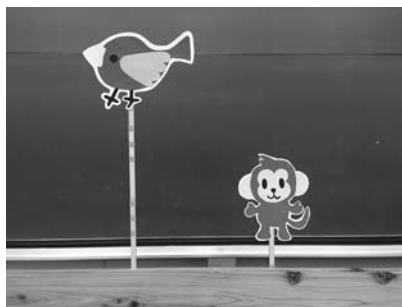
【写真 3-7】
完成した舞台（裏面）



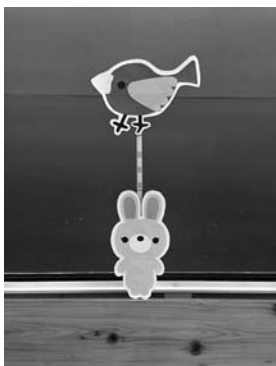
【写真 3-8】
穴の一つに磁石を入れた棒



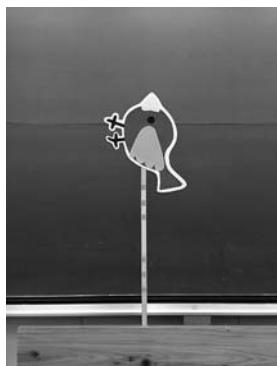
【写真 3-9】
ネームシールを巻いた棒



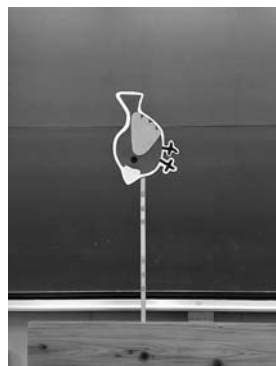
【写真 3-10】
高さの表現



【写真 3-11】
同じ縦軸の中での高低の表現



【写真 3-12】
キャラクターの向きの変更
（上向き）



【写真 3-13】
キャラクターの向きの変更
（下向き）

4. 実演と検証

ここでは、実際の制作と演劇の様子を基に、発展型ペープサートの有用性について考察する。

4-1. 制作の様子

「保育実践演習 A」を受講する 22 人の学生を 3 つの班に分けた。それぞれの班でオリジナルの脚本を考え、授業実数内に制作から練習までを行う。授業は 90 分授業を計 3 回行った。なお、全ての班の活動は授業内の 3 回に留まらず、自主的に集まる姿が見られた。

【写真 4-1】は棒に磁石をはめる様子である。棒の穴が磁石の径より小さいため、初めは磁石を穴にはめることに苦戦している学生の様子が窺えた。また穴にはめた磁極が揃わない学生も何名か見受けられた。しかし慣れてくると、多くの学生が手際よく棒を作成していた。

【写真 4-2】はキャラクターを制作している様子である。キャラクター制作に際しては、寸法に留意する必要性を有する。紙が大きすぎるとその自重によって磁石から外れてしまう危険性が懸念され、小さすぎると細やかな表現が難しくなってしまう。他のキャラクターの大きさも鑑み、適切な大きさを制作しなければならない。この制作過程では、離れた位置から作品同士を比較することで、適切な大きさを見定める学生の姿が見受けられた。

4-2. 演目と内容

ここでは、3 班それぞれの演目・内容・学び・工夫・時間の詳細を記す。

1 班	
演目	ほしおの冒険
内容	ある日ほしおは、夜空に星がないことに気づく。実は星たちは森や海でかくれんぼをしており、そのことをお月さまが教えてくれる。ほしおは森と海に星を探しに行き、鑑賞者（子どもたち）と共に星を見つける。最後に、お月さまに頼んで星を夜空に返してもらう。
学び	七夕の日に夜空を見上げて星を探してみよう
工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・星に扮した演者と子どもたちとの対話によってストーリーが進められている点 ・舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用） ・縦に繋げた棒を活用している点（高さの表現） ・キャラクターの両面を活用している点 ・劇中に子どもたちの積極的な参加を促している点（夜空に星を返す場面）
時間	約 10 分

造形的視点から見る児童文化財「ペープサート」の発展と可能性

2班	
演目	さとしの宝物
内容	友達のいない鬼くんがいたずらでさとしくんの宝物を盗んでしまう。さとしくんは仲間と共に雲の上にいる鬼くんのもとへと向かう。さとしくんとその仲間は鬼くんに宝物を返してくれるよう説得する。初めは抵抗していた鬼くんも、最後は宝物を返してくれる。戻ってきた宝物を開けると、中身は仲間へのプレゼントであり、その中には鬼くんへのプレゼントも用意されていた。鬼くんは喜び、さとしくんたちと仲良くなった。
学び	友達と仲良くする気持ちを育む
工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・縦に繋げた棒を活用している点（高さの表現） ・縦に繋げた棒に、2体のキャラクターを貼り付けている点（高さを活かした表現） ・大きな絵に複数の棒を用いている点 ・多数のキャラクターを同時に舞台上に登場させている点 ・舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用）
時間	約 10 分

3班	
演目	マイクとおもちゃ
内容	部屋を片付けられないマイクが、ある日片付けをしないまま寝てしまう。夜が明けると、マイクが一番気に入っているロボットのおもちゃがなくなっていた。幼稚園から帰ってきたマイクは部屋を片付けるが、そのロボットは見つからない。そこで鑑賞者（子どもたち）にロボットの場所を尋ね、ロボットが隠れている場所を教えてもらう。そして無事にロボットを見つけ、最後に鑑賞者（子どもたち）と「おもちゃのチャチャチャ」を歌う。
学び	片付けを率先して行く気持ちを育む
工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ギターを活用している点 ・ママを脚だけで表現している点（大きさを想像させる工夫） ・多数のキャラクターを同時に舞台上に立たせている点 ・舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用） ・子どもへの問いかけが行われている点 ・おもちゃのチャチャチャを歌う場面を設定している点
時間	約 6 分

4-3. 演劇の様子

演劇の内容について見ていく前に、舞台周りの環境について触れておきたい。本発表研究では長机を3台使用し、黒布（寸法 180 mm×270 mm）を2枚使用した。鑑賞者（子どもたち）が机の下を見ることができないように、黒布で机を覆った。机の真ん中に舞台を置き、演者から見て舞台手前にキャラクターや台本を準備した。

子どもについては、2園から計31人の5歳児を招待した。発表の進行については、まず2つの班が発表を行い、休憩を挟んだ後に、残りの班が発表するという流れで進めた。下記に、それぞれの班の造形的な工夫や、鑑賞した子どもの反応等を記す。

4-3-1. 「ほしおと冒険」

「ほしおの冒険」では、主として下記①～⑤の工夫が見られた。

①「星に扮した演者と子どもたちとの対話によってストーリーが進められている点」【写真4-3】

【写真4-3】は星に扮した演者であり、演者と子どもの会話によってストーリーが展開している点に、他の班にはない工夫を見ることができた。星を探す際に「星はどこかな？」と問いかけると、子どもたちは「ここー！」と元気よく指をさしており、また、星を夜空に返す際に「どうやったら星を空に返せるかな？」と問いかけると、子どもたちは「ロケット！」「飛行機！」「鳥！」「お月さま！」と元気よく返答していた。

この手法によって、子どもたちは集中して劇に参加することができており、子ども参加型のペープサートの一つの在り方が提示されたと考える。

②「舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用）」【写真4-4】【写真4-5】

【写真4-4】【写真4-5】では、背景として使用する紙の裏に棒を横向きにつけており、それらを事前にステンレスシートに貼り付けておくことで、劇中での円滑な場面転換に成功している。また、当演目ではあらかじめ背景の紙に星を隠しておくことによって、子どもが星を見つけることを期待しており、実際に子どもたちから「星がここにおるー！」などの声を多数聞くことができた。

③「縦に繋げた棒を活用している点（高さの表現）」【写真4-6】

【写真4-6】では、2本の棒を縦に繋ぐことで高さを出す表現を試みており、特に腕の長さとも相まって、その表現の効果を感じることができた。

④「キャラクターの両面を活用している点」【写真4-7】【写真4-8】

ほしおの困っている表情と笑っている表情が紙の両面に描かれており、ひっくり返して棒につけることで2種類の表情を楽しむことができるよう工夫を凝らしていた。従来のペープサートのように手軽に表情を変えることができ、子どもの興味を惹き付ける仕掛けであると考えられる。

⑤「劇中に子どもたちの積極的な参加を促している点（夜空に星を返す場面）」【写真4-9】

【写真4-9】は子どもが夜空に星を返している様子である。これは①と通じるところであるが、子どもの参加については問いかけだけでなく、ストーリーを完成させるための要素の1つとして子どもの活動を脚本に組み込んでいる点に工夫を見ることができた。これはマグネット式ペープサートに限らない演じ方の一つの手法として、幅広い活用の可能性が示唆されていると考える。

4-3-2. 「さとしの宝物」

「さとしの宝物」では、主として下記①～⑤の工夫が見られた。

①「縦に繋げた棒を活用している点（高さの表現）」【写真 4-10】

【写真 4-10】は鬼が宙に浮いている表現であり、棒を 2 本用いて高さを出している。さらにその鬼の下には雲がつけられており、2 種類の絵が同じ縦軸に並んでいる表現となっている。これについては下記の②で詳細を記す。

②「縦に繋げた棒に、2 体のキャラクターを貼り付けている点（高さを活かした表現）」【写真 4-10】【写真 4-11】

【写真 4-10】からわかるように、鬼の下には雲が貼り付けられており、鬼が雲に立つ姿が表されている。この雲は鬼の絵の一部ではなく、【写真 4-12】からわかるように別々に作られた絵である。高さを出すために連結した 2 本の棒の異なる位置に絵を配置することによって、従来のペープサートでは不可能な「高さを活かした表現」が可能になったと考える。

③「大きな絵に複数の棒を用いている点」【写真 4-13】

【写真 4-13】は家の絵であり、他の絵と比べると非常に大きいことがわかる。この大きさの絵をたわむことなく立たせるためには、通常であれば芯となる針金や棒を入れ、それらをテープ等で固定する必要を有する。しかし、マグネット式ペープサートでは専用の棒をつなぎ合わせるだけで大きな絵を支えることができる。このように、紙を支持するための特別な仕組みを必要とせず、マグネット式ペープサートの棒のみで多様な大きさの絵に対応できる点に、この新しいペープサートの特色があると考えられる。

④「多数のキャラクターを同時に舞台上に登場させている点」【写真 4-14】

【写真 4-14】は大小合わせて 10 の絵が舞台上に登場している様子である。劇の中ではプレゼントを固定させ、キャラクターのみを動かしており、静と動の表現を同時に行っている。動かす必要のない絵を固定できるため、演者は動かす絵だけに集中することができる。このような点にもマグネット式ペープサートの造形的な特色があると考えられる。

⑤「舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用）」【写真 4-15】

【写真 4-15】を見ると、舞台のステンレスシート側に雲の絵で貼り付けてあることがわかる。仕組みは上記 3-3-1-②の通りであるが、当演目では舞台を前後にずらしており、キャラクターが雲の上に立っているかのような表現がなされている。舞台については並列での活用を想定していたが、学生の柔軟な発想によってその配置が工夫されている。このように、舞台までもが劇の重要な表現として実践の中で活用された点に、想定外の成果を見たと考えられる。

4-3-3. 「マイクとおもちゃ」

「マイクとおもちゃ」では、主として下記①～⑥の工夫が見られた。

①「ギターを活用している点」

当演目では、BGMとしてギターが用いられた。マイクがおもちゃで遊ぶときや、マイクがおもちゃを探すとき、さらにはマイクがおもちゃを片付けるときなどに、楽しそうなメロディーや悲しいメロディーが演奏され、子どもの興味を惹き付ける演出がなされた。

②「ママを脚だけで表現している点（大きさを想像させる工夫）」【写真4-16】

【写真4-16】はママの脚を描いた絵である。これはママの大きさや、怒った顔、優しい顔を想像させることを目的とした表現であり、子どもたちの創造力を掻き立てる造形的な工夫になり得ていると考える。

③「多数のキャラクターを同時に舞台に登場させている点」【写真4-17】

【写真4-17】はおもちゃで遊んでいるマイクの様子である。おもちゃの絵（10個）と、ベッドとマイクの絵を合わせると、合計12の絵が舞台に登場していることがわかる。これらの絵は舞台全体に均等に広がるよう配置されており、鑑賞者の視点に立った細やかな配慮が感じられた。

特に、この脚本ではおもちゃを同時に動かすことがないため、学生から「一人で演じることができる」という声を聞くことができた。多数の人形を同時に活用することは、従来のペープサートでは難しいため、当演目においてマグネット式ペープサート特有の工夫を見ることができたと思う。

④「舞台を活用している点（ステンレスシート側を背景として活用）」【写真4-18】

【写真4-18】から、おもちゃ箱の絵をステンレスシートに貼り付けていることがわかる。部屋の中にあるおもちゃ箱を背景として使用することで、劇の世界観が表されている。

⑤「子どもへの問いかけが行われている点」

当演目では、隠れたおもちゃを見つけるために、おもちゃが隠れている場所を鑑賞者（子どもたち）に尋ねる場面が見られた。子どもたちは「机の下ー！」「机の後ろー！」「机の横ー！」など元気よく返答しており、この子どもたちの返答によりマイクはおもちゃを見つけることができる、という脚本になっていた。

また、当演目では子どもへの問いかけとは別に、セリフとして「おもちゃはどこかな？」とマイクが述べる場面があった。これに対して、多くの子どもたちが「ベッドのところー！」と元気良く反応する姿が見受けられた。このように、意図せず子どもたちを巻き込むことができる点にも、ペープサートの面白さや奥深さがあるように感じられた。

⑥「おもちゃのチャチャチャを歌う場面を設定している点」

当演目では、最後におもちゃのチャチャチャを子どもと一緒に歌い、劇を締めた。ギターでメロディを奏で、歌に合わせてペープサートを動かすことで、子どもたちが劇の余韻に浸ることができたのではないかと考える。

造形的視点から見る児童文化財「ペープサート」の発展と可能性



【写真 4-1】
棒に磁石をはめる様子（木槌を使用）



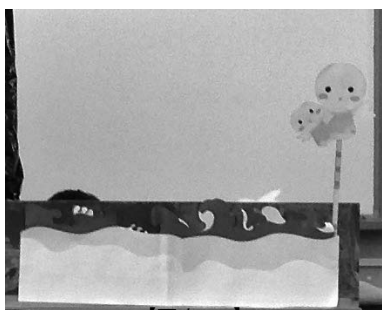
【写真 4-2】
キャラクターを制作する様子



【写真 4-3】
星に扮した演者



【写真 4-4】
舞台を背景として活用（森）



【写真 4-5】
舞台を背景として活用（海）



【写真 4-6】
縦に繋げた棒の活用（月の表現）



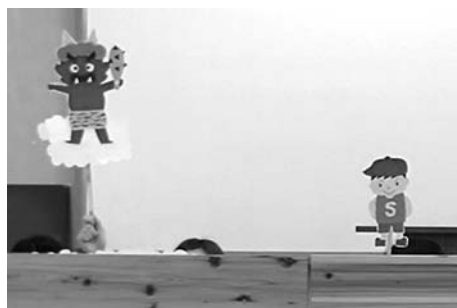
【写真 4-7】
キャラクターの両面を活用（表面）



【写真 4-8】
キャラクターの両面を活用（裏面）



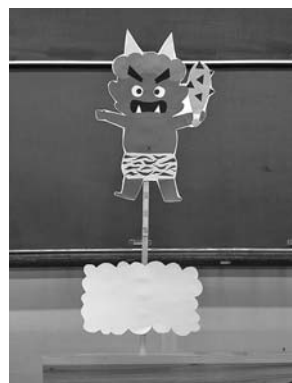
【写真 4-9】
子どもたちの積極的な参加（夜空に星を返す場面）



【写真 4-10】
縦に繋げた棒の活用（鬼の表現）



【写真 4-11】
縦に繋げた棒の活用（鳥の上に乗る動物の表現）



【写真 4-12】
別々に作られた鬼と雲



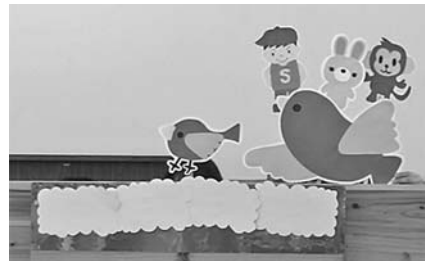
【写真 4-13】

大きな絵に複数の棒を活用している様子（家）



【写真 4-14】

多数のキャラクターが同時に舞台に登場している様子



【写真 4-15】

舞台を背景として活用（雲）



【写真 4-16】

ママを脚だけで表現（大きさを創造させる工夫）



【写真 4-17】
多数のキャラクターが同時に舞台上に登場している様子



【写真 4-18】
舞台を背景として活用
(おもちゃ箱)

5. 成果と課題

本章では本実践研究の成果と課題を端的に記す。

5-1. 成果

マグネット式ペープサートの想定されるメリットとして、第2章に次の4点の内容をあげた。①多数のキャラクターを舞台上に登場させられる点、②棒の連結による高低の表現、③キャラクターの向きを変えることができる点、④絵を描いた紙の両面を活用できる点。①、②、④は本実践において確認されたため、想定したメリットが実践において活用可能であることが明らかとなった。この点の一つ成果を見たと考える。

また、舞台についてはステンレスシートの面を背景として活用する工夫が見られた。これは想定外の手法であったが、舞台の反転に伴い背景が表れる場面では子どもたちから驚きの声や歓声が上がったため、子どもたちの興味を惹く上で有効な手法であると考えられる。また併せて、劇の世界観を表現する上でも有用であると感じられた。このように、想定外の造形的な工夫が見られた点にも成果を見たと考える。

5-2. 課題

本研究の一番の課題は磁力の調整である。特に受け手となるステンレスシートの磁力が弱く、棒が傾いてしまう場面も見られた。舞台にしっかりと棒がつかなければ、演じる際に余計なストレスを抱えてしまうことにもなりかねない。改善策として、ステンレスシートを磁力の強いマグネットシートや、より厚いステンレスシートに変更するといった案があげられる。しかし、強力なマグネットシートはステンレスシートよりも高価なことが多く、また厚いステンレスシートは金切バサミで切ることが難しいため、代替品については慎重に検討していきたい。

学生のアンケートからは、舞台の両面にステンレスシートを貼ることで、より多様な表現が可能になるのではないか、という意見を得た。仮に舞台の両面にステンレスシートを貼った場合、木のマチエールが消えてしまうため、土台が木材である必要性がなくなる。そのため、持ち運びの利便性を考慮し、より軽い素材を土台として用いることができるため、舞台の素材選択も含めて今後の検討課題としたい。

6. おわりに

マグネットの棒を子どもたちに渡すと、つけたり外したりする行為を楽しむ姿が見受けられた【写真 6-1】。また、友達から棒を借りて、棒を長く伸ばしていく行為に興味をもつ子どもの姿も見られた。このように、棒や舞台に興味を示す子どもも多く、マグネットの棒を用いた造形あそびへの発展の可能性も、本実践研究によって垣間見ることができたと考える。

舞台については、第 5 章の中でステンレスシートの磁力が弱いことを指摘したが、この舞台は大いに発展の可能性を秘めていると考える。例えば、より安価に舞台を作るならば、金属製のブックエンドやワイヤーネットを用いて代用することができる【写真 6-2】。これらは結束バンドを用いることで手軽に制作することができる。さらに手軽さを求めるならば、舞台を段ボールで制作し、その手前にブックエンドを置くことでマグネットの棒を活用することもできる。この方法であれば、従来のペープサートとの併用が可能となる。

本研究はなるべく安価に済むよう、材料の多くを低価格な量販店から購入している。しかし、穴の空いた棒自体は 1 本約 120 円と高価であり、またステンレスシートは 1 枚約 5000 円と決して安価な商品ではない。マグネット式ペープサートは第 5 章の成果で示した通り、従来のペープサートにはない造形的な魅力を有する保育教材であると考え。そのため、より安価な教材開発を継続することで将来的には広い普及を図りたいと考える。

また、第 5 章で示した通り、本研究の最大の課題は舞台にあった。特に舞台の前面を背景として活用したいという要望も聞かれたため、改善策としてパネルシアターの要素を取り込むことも考えていきたい。例えば舞台の前面に不織布を貼ることで、P ペーパーを貼り付けることができる。P ペーパーは本研究のようにゼムクリップ等を貼る手間を必要としないため、より手軽に背景を充実させることができると考える。

ペープサートの源流は江戸時代の「写し絵」であり、これを原形とする明治中期の「立絵」の造形は精緻なものであったと伝えられている。このような保育教材の歴史的な価値を理解し、かつ現代の道具を活用することによって、歴史に根ざした利便性の高い新たな児童文化財の開発を進めていきたいと考える。



【写真 6-1】
マグネット式ペープサートの棒や
舞台に興味を示す子どもたち



【写真 6-2】
ブックエンドとワイヤーネットを用いた簡易舞台

註

- 1) 永柴孝堂：『新しい「紙人形」教材 ペープサート脚本集』，ひかりのくに， p.18, 1977
- 2) 永柴孝堂：前掲書， P 18
- 3) 永柴孝堂：前掲書， P 19
- 4) 三宅茂夫・浅野泰昌：「幼児教育における人形劇の教育的価値に関する先行研究の問題点－倉橋惣三，川尻泰司，内山憲尚，清水浩二を中心として－」，『教育諸学研究』 21, p.21, 2007
- 5) 永柴孝堂：前掲書， p 20
- 6) 実用新案登録第 3212250 号（2017. 8. 31）
- 7) 大阪大谷大学が開講する、幼児教育専攻 4 年次配当の授業（2 単位）

文献

- ・永柴孝堂：『新しい「紙人形」教材 ペープサート脚本集』，ひかりのくに， p.18, 1977
- ・三宅茂夫・浅野泰昌：「幼児教育における人形劇の教育的価値に関する先行研究の問題点－倉橋惣三，川尻泰司，内山憲尚，清水浩二を中心として－」，『教育諸学研究』 21, p.21, 2007